



# なぜXMLコンソーシアムが Web 2.0なのか？

“Web2.0 for Enterprise” 編

2006年3月3日

XMLコンソーシアム エヴァンジェリスト  
メタデータ株式会社代表取締役社長

野村直之



Abstract:

## Web2.0 for Enterprise

- 徹底してデータ中心主義 ~ データを制する者が勝利
- 参加のアーキテクチャ (開発スタイル)
  - 全社員参加 永遠の 版 (良い意味での)

有効性の評価指標:

- 社員、関係者から如何に適時に有用な情報、知識を引き出し、共有・流通・加工し活用できるか
  - 社内「folksonomy」はKM2.0か: del.icio.usやFlickr
  - <http://japan.cnet.com/column/web20/story/0.2000054679.20090039-4.00.htm>
  - インフラは無料。規模と質の確保に外部Webアプリとマッシュアップ



XML Consortium

## Web2.0時代の企業IS：データ中心に有意な統合

### ■豊かな構造の付加やメタデータ活用でクロス連携

- リッチなUI Direct Manipulation
- 時系列構造、版の自動管理 (永遠に のweb pageで)
- 場所構造 Physical 例:緯度、経度(iPlat)、  
高度、住所、階、  
Logical 例:所属、プロジェクト名

加えて、ヒト、モノ(document)、コト(event)の戦略的メタデータ

- ・メタデータを軸に、散在していたデータを一元管理。
- ・その構成要素間の紐付け。 ・統合管理

メタデータでコンテンツや機能をユーザ中心に  
Remixing; 新しい付加価値を創造; 流通・再利用を促進;



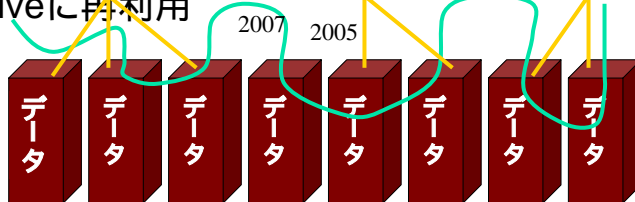
XML Consortium

- ヒト、モノ(document)、コト(出来事,状態)のメタデータ  
データを有機的に連携。

- メタデータ(含リンク)だけ付け替えて  
不変の過去データを新しくcompliant /  
creativeに再利用



XBRL  
:

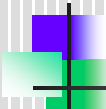


-1999 地域別、業種別..; 複数省庁の白書..



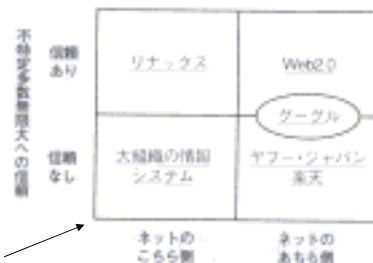
## Web2.0 for Enterprise初期の留意点

- IS運用部門との調整：
  - ISマネージ：個人情報保護、I S M S、日本版 S O x 法等、コンプライアンス、セキュリティに必死に対応
  - Web2.0? まったく関係ない! 排除すべき存在だ!
  - しかし過去の歴史はどうだった?
  - Web1.0: 95年に商用ブレイク 96, 7年にはイントラネット文書管理がトレンド、常識に。
  - Web2.0: 自宅で創造的な良い環境を知ったユーザは「会社では別」では済まない。
- 企業内情報システムと外部Web2.0機能のマッシュアップをどう安全に効果的にできるか?



## Web 2.0の定義いろいろ

- 梅田望夫 (『ウェブ進化論』ちくま新書, 2006.2.10刊)
  - 『ネット上の不特定多数の人々(や企業)を、受動的なサービス享受者ではなく能動的な表現者と認めて積極的に巻き込んでいくための技術やサービス開発姿勢』



第6章の図「Web進化の方向」より

発想のあり方

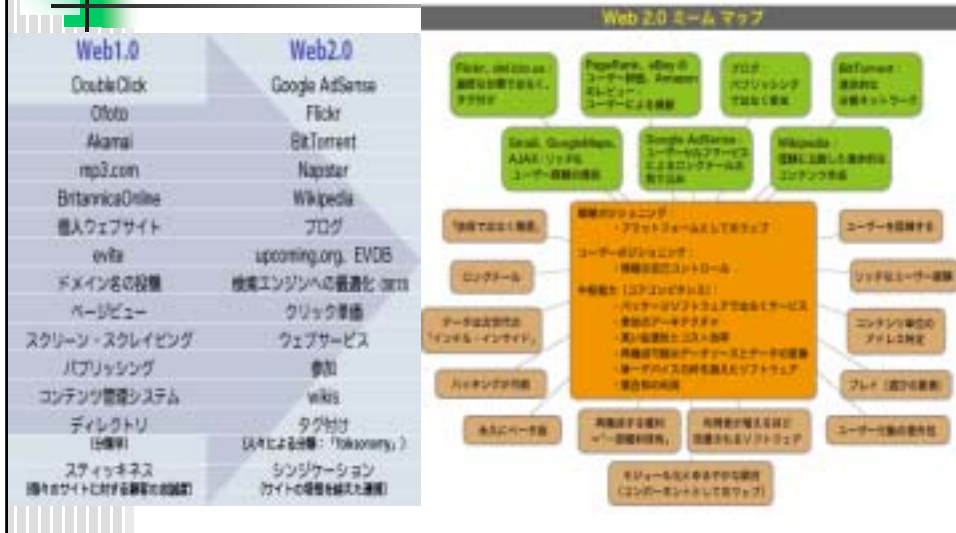
<http://japan.cnet.com/column/web20/story/0,2000054679,20090039,00.htm>

の目的は、Web 2.0という言葉でわれわれが何を意味しているのかを明確にすることである。



O'Reilly

長過ぎ!(笑); あまりに普遍化したためか、最近同志がWeb2.0なんて無いと言ってみたり..



# O'Reilly の主張とデザインパターン

XML Consortium

1. **プラットフォームとしてのウェブ**
  - Netscape 対 Google : ソフトウェアの価値はそれが管理するデータの規模とダイナミズムに比例
  - DoubleClick 対 Overture / AdSense : Web 2.0の教訓: ユーザーセルフサービスとアルゴリズムによるデータ管理を導入し、ウェブ全体 - 中心部だけでなく周辺部、頭だけでなく長い尾の先にもサービスを提供
  - Akamai 対 BitTorrent : 利用者が増えればサービスは自然に改善
2. **集合知の利用** 教訓: Web 2.0時代には、ユーザーの貢献がもたらすネットワーク効果が市場優位を獲得する鍵となる。
3. **データは次世代の「インテル・インサイド」**
4. **ソフトウェア・リリースサイクルの終焉**
  1. オペレーションそのものがコアコンピタンス
  2. ユーザーを共同開発者として扱う

# O'Reilly

- 5. 軽量なプログラミングモデル
  1. システムをゆるやかに統合可能に
  2. 調整 (coordination) ではなく、連携 (syndication)
  3. ハッキング可能でリミックス可能なデザイン
  4. 組み合わせによる革新
  5. 再利用を徹底した軽量なビジネスモデルへ。
  
- 6. 単一デバイスの枠を超えたソフトウェア
  - iTunesとTiVo：シームレスにインフラと一体化
  - データ管理、メタデータ管理をWeb/localで管理

## Web 2.0の定義いろいろ



### ■ 上原仁氏:

[http://ceonews.jp/archives/2005/10/web20\\_7map.html](http://ceonews.jp/archives/2005/10/web20_7map.html)

- 『Webをプラットフォームとして位置づけ、オープン志向・ユーザー基点・ネットワークの外部性といったインターネット本来の特性を活かす思想に則って提供されるサービスの次世代フレームワーク』

Web 2.0の主たる構成要素と代表的なサービスは以下の7分類になる。

1. Folksonomy: 階層分類学でなく、ユーザーの手で自由に分類する思想・・・Flickr、はてなブックマーク
2. Rich User Experiences: AJAX, DHTML, Greasemonkey等を駆使し、ページ上で直感的操作・・・Gmail, GoogleMap, goo地図
3. User as contributor: ユーザー体験の蓄積をサービスに転化・・・PageRank, eBayのユーザー評価, Amazonレビュー
4. Long tail: ユーザーセルフサービスの提供でロングテールを取り込む・・・Google AdSense
5. Participation: ユーザー参加型開発、ユーザー生成コンテンツ・・・ブログ, mixi
6. Radical Trust: 進歩的性善説、知のオープンソース・・・Wikipedia、はてなダイアリーキーワード
7. Radical Decentralization: 進歩的分散志向、ネットワークの外部性・・・Winny, BitTorrent

## Web2.0 = Webプラットフォームのmajor version up ?

- N. Saitoh and N.Nomura の議論：
- 本日後半のRESTとWeb2.0の議論を参照
- RESTやT.B.Leeの‘共創知’でWebの原点に回帰しつつ
- 新たに豊かな構造を導入してこそWebプラットフォームの ver. 2.0 なのでは？



この観点で再訪

“Web2.0時代の基幹系情報システムへのメタデータ活用”，2006.2.3,  
PAGE2006クロスメディアコンファレンス, XML Consortium,  
ドキュメント・メタデータ活用部会, より引用：

## Web2.0時代の企業IS：データ中心に有意な統合

- 豊かな構造の付加やメタデータ活用でクロス連携
  - リッチなUI Direct Manipulation
  - 時系列構造、版の自動管理 (永遠に のweb pageで)
  - 場所構造 Physical 例:緯度、経度(iPlat)、  
高度、住所、階、  
Logical 例:所属、プロジェクト名

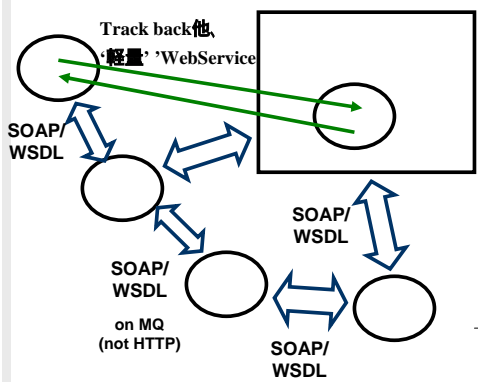
加えて、ヒト、モノ(document)、コト(event)の戦略的メタデータ

- ・メタデータを軸に、散在していたデータを一元管理。
- ・その構成要素間の紐付け。 ・統合管理

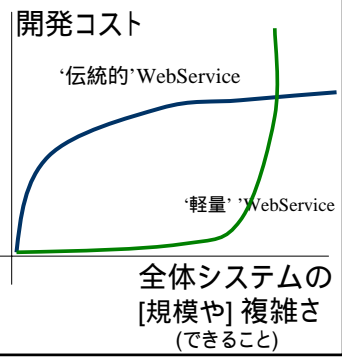


# ‘伝統的’WebServiceとREST準拠の ‘軽量’ WebService の使い分け、併用

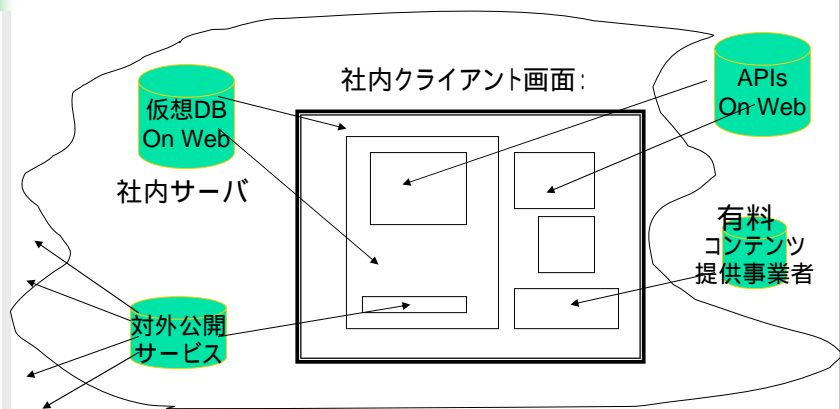
by ドキュメント・メタデータ活用部会 06.01.26



Sky(株)玉川竜司さん  
による概念的な比較:



# 社外サービスと社内サービスのマッシュアップから



基幹データ(含む個人mbox)を吸い出され過ぎないように注意  
セキュリティ、著作権管理&課金 (DRM) が課題



## いずれは本格的なRemixingまで

- vCard, .. ?Card、?Calendarなどのmicroformatsで社員1人1人ごとの業務が快適となるよう最適化したRemixingで、規格品GWの終焉？
  - 入り口はKMなど柔らかいITから？
    - 「人口密度の計算式」のような知識を広域分散環境から取ってきてブラックボックスのまま使いたい！
  - Google以外にもシンプルで、(仮想的にでも)巨大DB備えた‘あちら側の’アプリを公開して欲しい
  - 日本の大企業が自らそうなる可能性は？
    - 専門分野、得意分野に特化した情報・知識サービス
    - ローカル情報、短寿命情報の提供サービス
- Web2.0時代の情報ベンダー(‘コンピュータメカ’ by 梅田さん)

結語: “一緒にビジョンを描き実現しましょう!”



## 1 ビジョン: functional message (partially machine understandable email) で広域分散Groupware

- 2015年の笑話: メールでふつうの言葉で文章書いてアポ取りしていた時代があったんだね!?
  - そう、2006年にやっと全ての機械が共通に理解できるカレンダーや関連メタデータ交換の仕組みがmicroformatsとして出てきて、
  - 組織内外の相手と、仕事内容そのものの協同編集だけじゃなくて、
  - 協業のための事務的なやりとりは機械任せで、確かに迅速、正確にできる基盤が誕生。
  - その結果、日付か曜日かどちらかが間違っているメール本文なんてあり得なくなったのか！